

Title	分子進化の理論
Author(s)	
Citation	物性研究 (1975), 24(1): A1-A1
Issue Date	1975-04-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/88996
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

基研研究会報告

分子進化の理論

昭和48年11月19日～22日、標記研究会が基研短期研究計画の一環として開かれた。分子生物学、比較生化学の発展に伴い、生物種の状態や、種間の相違などをDNAや蛋白質など分子のレベルで定量的に記述し得るようになり、数多くの実験データが蓄積されてきた。このような分子の種間差異を引起す素過程としては、分子の機能とは無関係な変化に負う所が多いとする、いわゆる分子進化の中立説が国立遺伝研の木村資生氏らによって提唱され、その当否が活潑に論議されている。

そもそも、種々の生体高分子はそれぞれ特定の機能をもった生物の構成素材である。素材だけをいくら調べても、生物らしい機能やその進化には達し得ないではないかと云われるかも知れない。しかし、生物の機能はその素材によって厳しく規定されているのである。とすれば、素材としての分子の進化なしには、その集合体としての生物の小進化はあり得ても大進化はあり得ないのではなからうか。実際、電子工業の発展には、真空管、さらにはトランジスターの出現が決定的であったのである。してみれば、分子進化の素過程の研究は、それが理論的に近づき易い問題であると云うことに止まらず、それは生命の起源を頂点とする生物の大進化を理解する上の基礎となるかも知れない。

こうした夢の下で、互に異なる背景をもち、異なる意識や方法の下で研究を進めている研究者が基研コロキウム室の静かな雰囲気の中で相互理解を深める機会を得たのは非常に有意義であった。研究会終了後、講演して下さった方々にお願いしてその要旨を提出して頂いた。所が世話人相互の連絡の不手際や、意志の疎通を欠いたため、この報告の発表が甚だ遅れて了った。このため執筆者や関係各方面に大変御迷惑をお掛けしたことを深くお詫びする。発表がおくれたため、その後の発表などあって現時点では多少適当でないものを含むかも知れないが、その大部分は今でも読みごたえのあるものと信ずる。読み返してみると当時のよい雰囲気が彷彿として、この参加者の幾人かが云われたように、是非近い将来に再び研究会を開き、ゆっくり新しい知見を交換し合いたいものと考えている。